もくじ　鹿浜慈眼寺と長谷寺交衆帳 1P　鹿浜での子どもの生活⑤ 3P
物流展レポート　くるかねパンフレット 4P

足立史談
第561号
2014年11月15日
足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL03-3620-9393
FAX03-5697-6562
〈25-308〉

『学侶交衆帳』（奈良・総本山長谷寺所蔵）

足立区の廃寺余話①　鹿浜慈眼寺と長谷寺交衆帳

柴田　英治

観音霊場として名高い真言宗豊山派の総本山長谷寺（奈良県桜井市初瀬七三一―一）に、「交衆帳（きょうしゅうちょう）」と呼ばれる史料群がある。交衆帳とは本山留学僧（通称「所化（しょけ）」）の学籍名簿で、全国から長谷寺に集まる所化の僧名、登山日、出身寺院、同所在地などが逐一記載されている。長谷寺には慶長年間から明治初期に至る交衆帳一三〇冊以上が現存している。

交衆帳のうち最古の二冊（『学侶交衆帳』・『交衆帳』）には、慶長九年（一六〇四）～寛永一九年（一六四二）の間に長谷寺に登山留学した、のべ八六〇名に及ぶ所化の名が記されている。そのうち二二五名は武蔵国の寺院出身で、国別では全国最多である（図①参照）。さらに武蔵国の所化二二五名のうち、少なくとも二三名は足立区域の寺院出身僧であることがわかる（図②参照）。交衆帳に所化出身寺院として登場する区内の寺院は、総持寺、恵明寺、吉祥院（以上中本寺）、円通寺、常善院、鹿浜宝蔵寺（以上小本寺）、安養院、鹿浜慈眼寺、地福寺（以上末寺・門徒）の計九ヶ寺である。当時の史料に乏しい足立区域にとって、長谷寺交衆帳のもたらす仏教・歴史地理関連の情報はとても貴重である。

九ヶ寺のうち鹿浜慈眼寺は明治五年（一八七二）に廃寺となった。寺院明細帳類に記された慈眼寺の姿は、明治維新期における当区域内廃寺群の典型といえる。廃寺群の特徴としては、①近世寺院本末制度の末端に

長谷寺遠景

図①　長谷寺留学僧の出身国
（慶長9年・1604～寛永19年・1642）

No.	国名	延人数	構成比
1	武蔵	225	26.6%
2	下総	147	17.4%
3	常陸	112	13.3%
4	上野	55	6.5%
5	土佐	43	5.1%
┆	（以下略）	┆	┆
	合計	845	100.0%
	（不明）	15	-
	総計	860	-

注：『学侶交衆帳』、『交衆帳』を基に集計、「出身国」は出身寺院の所在国。

図②　長谷寺交衆帳に見える足立区域の寺院出身僧
（慶長 10 年・1605～寛永 19 年・1642）

入山年	出身寺院所在地	寺号・身分	僧名	備考
慶長 10	下足立	吉祥院	真良房賢真	総持寺中興第十二世
元和 3	舎人	円通寺住僧	順説房長意	
元和 4	下足立郡 惣持寺	真良房賢真	再住	
元和 7	下足立渕江	吉祥院弟分	覚音房神慶	
寛永 4	下足立郡鹿浜	慈眼寺	俊良房盛源	廃寺
寛永 5	下足立郡宮城	持福寺（ママ）	順正房頼誉	現表記「地福寺」
寛永 5	下足立郡渕江郷	宝蔵寺住僧	教誉房済俊	鹿浜宝蔵寺か？
寛永 7	下足立渕江庄	惣持寺弟分	正意房覚宥	
寛永 7	下足立渕江庄	惣持寺弟分	俊長房賢智	
寛永 8	下足立郡西新井	想持寺（ママ）直弟	真良房賢海	現表記「総持寺」
寛永 8	下足立郡西新井	想持寺（ママ）末弟	良忍房賢誉	現表記「総持寺」
寛永 8	下足立渕江庄千住	長福寺弟分	甚鏡房実清	現安養院
寛永 9	下足立鹿浜	宝蔵寺直弟	見音房空誉	
寛永 9	下足立鹿浜	宝蔵寺直弟	鏡円房真弘	
寛永 10	下足立郡宮城	恵明寺弟分	覚任房頼専	
寛永 11	渕江	浄善院（ママ）弟分	甚説房源信	常善院
寛永 12	下足立渕江	吉祥院弟分	存清房賢清	
寛永 12	下足立渕江	吉祥院弟分	真宗房真照	
寛永 12	下足立渕江	吉祥院	宗深房良雄	
寛永 14	下足立	惣持寺末弟分	正印房玄範	
寛永 14	下足立渕江之郡	吉祥寺（ママ）弟分	文朝房尊朝	吉祥院か？
寛永 16	下足立渕江	吉祥院門弟	堯説房賢秀	
寛永 17	足立郡淵江	宝蔵寺弟分	甚性房宥誉	鹿浜宝蔵寺か？
寛永 19	下足立	恵明寺弟分	宗印房頼栄	

注：『学侶交衆帳』・『交衆帳』（以上原本）を基に『大伝法院臈次僧名帳』（翻刻本）で補訂。

位置する小規模寺院（東国密教における「門徒」等）が多い、②葬祭檀家をほとんど持っていない、③別当・持神社として村鎮守と関係の深い場合が多い、などが挙げられる。当時の慈眼寺も門徒寺院で葬祭檀家を持たない一方、かつてはズシ鎮守下氷川社（氷川神社または島氷川、鹿浜二丁二八－四）別当で、境内は下氷川社参道に隣接していた。

交衆帳によれば慈眼寺の俊良房盛源は、寛永四年（一六二七）一一月修学のため長谷寺に登山しており、そこには新義真言宗の定めに従い本山で修学に励む所化の姿が窺える。一方で上氷川社（氷川神社または糀屋氷川、鹿浜二－一八－二〇）末社には寛永一八年（一六四一）氷川社塔造立の棟札が残され、「別当慈視寺（ママ）俊誠房継玄」の名が記されているという。それは早くも寛永年間に氷川社別当として活動する、慈眼寺僧のもうひとつの姿である。

明治政府の宗教統制によって、葬祭檀家のいない小寺院の多くが廃寺とされ、村落の風景から消えていった。しかし、交衆帳や棟札はそんな村の祈祷寺院「慈眼寺」僧の、微かで確かな足跡を今に伝えているのである。

【主要参考文献】「学侶交衆帳」・「交衆帳（原本表題欠）」（奈良・総本山長谷寺所蔵、櫛田良洪・玉橋隆寛編『新義真言宗史料1』所収）／総本山長谷寺「文化財保存修理のご浄財ご寄進による学侶交衆帳修復のご報告」（『長谷寺』五六）／林亮勝・坂本正仁『長谷寺略史』／足立区立郷土博物館編『足立風土記稿－地区編3江北』／拙稿「明治期史料から探る足立区内の廃寺跡について」（『足立史談』五三七）
※交衆帳原本の閲覧・掲載許可及び貴重なご教示を下さった奈良・総本山長谷寺及び山岡隆雄師（教務部）、甲田弘明学芸員（宗宝蔵）に深く感謝申し上げます。

－つづく－（渕江の歴史研究会）

廃寺ファイル①　慈眼寺

山号：青龍山
宗派：新義真言宗
廃寺年：明治５年（1872）10月
本寺／寺格：宝蔵寺／曾孫門徒
境内地：鹿浜村字糀屋 1641 外
本尊／その他：阿弥陀如来／下氷川社別当

縁故疎開ですごした北鹿浜町の想い出㉓

鹿浜での子どもの生活　5

小川　誠一郎

■運河の風景　杉角材の橋を渡ると埼玉県、乾いた畑ばかりが広がる。ヒバリが青空高く舞い羽ばたき囀っている。大きな群れになったスズメが、わがもの顔に飛び回っている。ばたばた皆で駆け出すと、低い草むらから、大型の殿様バッタが一緒に飛び出してくる。格好良いなあ！つかまえてやろうと、皆と離れて着陸地点にそっと近付くと、姿を確認する間もなく、数メートル先でもう気づかれ逃げられてしまう。実に用心深い、捕虫網でもないと無理だ。

道草を食いながら二百メートル程行くと風景は一変し、密生した屋敷林に抱かれた一軒の農家が見えてくる。垣根のそばを抜けると目の前が運河だ。木々の枝葉が水辺へ伸び掛かり、自らの姿を映しこんで蒼い空の反映と混じり合う、懐かしい水彩風景画の世界。子供達はここに来るとなぜか心穏やかになり、日常とは少し違う、情緒ある光景の優しさに満たされる。縄張りを超える遠出への緊張と高揚感がほぐれて来たのだろう。県境のこの辺りは畑ばかり、住家が少ないので、同年代の子供たちとの遭遇に身構える必要もなく、気兼ねなしにどこへでも踏み込んで行ける楽しみがあった。今度は運河へ行くのだよ！と得意そうにもらすと、付近の子供の溺れた話がどこからともなく耳に入ったのを覚えている。こうした背景は警戒心を高めはしたが、現地の友好的な佇まいが子供達をすっかり安堵させたのだ。

河の幅は二〇メートル程、皆のたむろする辺りから八〇メートルほど先に、掘削の先端（中断）部分があり、当時は完成された貯水池のような、コンクリート構造物で整備されていた。あふれた水抜き用の水路は確保されていたと思う、あれがそうだったのかしら？運河の水は透明度こそ落ちるが、溜め池の沈黙した水というより、用水堀を流れる生気ある水だった。泳ぎの上手いのがいないので中央部の深さが分からない、で、子供達は背が立つ岸辺近くに張り付いて、飛び込み遊びなどに熱中した。一方、真ん中辺を悠々と泳いで縦断するお兄さん達の姿も見えた。締め切り門の近くは向こう岸まで、子供が顔を出したまま歩いて横断できるほどの深さ、静かなプールのように安全だった。この水路には流域の小河川の流入がないので水質は良好だが、栄養価に乏しいのだろう水生動物は棲みにくく、水辺の植生にとっても厳しい環境に見えた。ある時、泳ぐ格好をしながら底を歩いて横断する途中、底泥にもぐった足先に何か固いものが当たった。ゴミかな？と探り出すと、からす貝の大きな黒い貝殻だ。

■リサイクルの時代　最近は市民の間に環境保護・保全の精神が浸透し、河川などへのゴミの不法投棄が減少したのは喜ばしい。で、当時はどうだったの？捨てるゴミなどがなかった。生ごみは肥料、そして野菜くず、藁、もみ殻、屑紙、木片などは燃料にと使い切る態勢が整っていたし、金物や古道具はリサイクルが利くので、屑屋さんが引き取ってくれた。糞尿が肥料になった時代でもある。もっとも、お彼岸の飾りものは川に流すものと決まっていたらしく、かさばったまま島堀の流れにのって、あちらこちら引っかかりながら行くのが見えた。実際、下流の人達が懸命に用水堀の浄化に手を貸していたのかもしれない？

■集落の堀ざらい　秋も深まり、島堀の流れも細る頃、島の男連が総出で堀のしゅんせつ作業に当たるのを見学した。「やねや」の屋号の家の脇を出てから五〇メートルくらいで、氷川神社へ向かう本流と荒川堤下の用水へつながる小さい流れとに分かれる。この分岐点を挟む百メートルほどが現場だ。男たちは褌一丁で枯れかけた用水堀に膝近くまでもぐり、足をとられながら底泥をさらって、勢いよく村道に投げ上げた。道端につきそう女連は、積み重なった泥土の山を路面の上に平らに広げ、また堀端の草の根方に入れ込んだ。ドブ泥のヘドロなどとは違う、健康的な匂いが周囲に満ちた。安眠を破られ跳ねまわるドジョウ、つかまえようと桶を手にした泥まみれの子供達、大騒ぎだ。

（慶応大学名誉教授）

運河の風景　現在の領家橋付近まで完成していた新芝川の一部。現在の東領家五丁目付近から東領家三丁目を望む。

物流展レポート

人気の南京締めコーナー

開催中の「あだち物流のひみつ」展では、物流産業が盛んな足立区らしさから、運送業を営んでいた方、商店でオート三輪を使っていた方をはじめ、多くの方にご観覧いただいています。見学に来館の小学生たちに人気のコーナーが、「南京締め」体験コーナーです。南京締めとは荷造りのときのロープ結束の技術で、荷物をしっかりと固定できます。館内のホールに小さなトラック荷台を設けています。

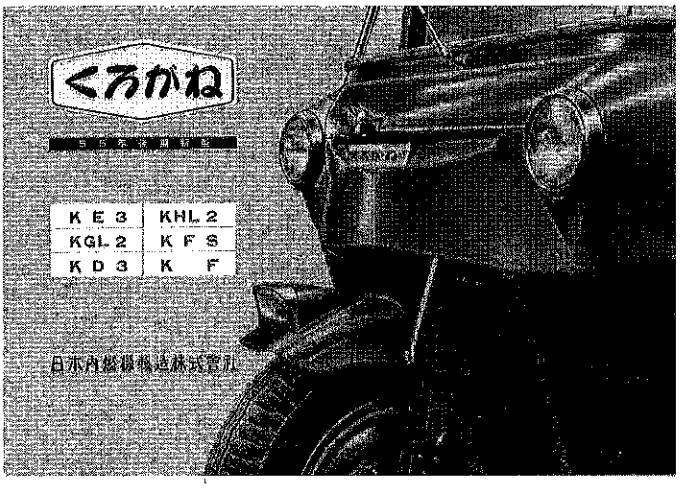
南京締めに挑戦する栗原小学校の児童たち

今回の展覧会で多くのご協力をいただきました足立貨物事業協同組合（事務所・足立区保木間）の皆さんのご協力による設置です。運送業の皆さんには「常識」ですが、小学生たちは苦労しながらロープを結んでいます。オート三輪も同組合のご尽力で展示できました。

増田健一コレクション

くろがねのパンフレット

展示資料で一番人気なのがオート三輪くろがねKGL3（昭和32・一九五七年・新座市・三共モータース蔵）です。展覧会開催後、新たに関連資料をご提供いただきました。「タイムスリップ昭和家電」展（平成24・二〇一二年）でコレクションを出展していただいた増田健一さん（大阪市立住まいのミュージアム研究員）から、貴重なくろがねのパンフレットをお寄せいただきました。展示しているKGL3の一世代前のKGL2（昭和30・一九五五年）です。パンフレットには「2ライト、2シリンダー、2カラー」という特徴を物語るキャッチコピー、「くろがねの堅牢さと活動力を象徴する水牛マスコット」、「小型軽量の車台に強力なエンジンはあらゆる道路条件下での酷使に耐える強力経済車です」等の文章が並び、くろがねの水牛アイコンの意味や、昭和30年代の道路事情を知ることが出来ます。



くろがねKGL2のパンフレット（昭和30年）

増田健一さんは近年『懐かしくて新しい昭和レトロ家電』（平成25年）、『続懐かしくて新しい昭和レトロ家電』（今年）を相次いで出版（いずれも山川出版社）、ご活躍になっています。書店でご覧になった方もいらっしゃるでしょう。

ほかにも島田安彦コレクションや区民の皆様から資料提供のお申し出をいただいています。展覧会開催後にお寄せいただいた資料は12月9日（火）から追加展示コーナーを設置します。どうぞご期待下さい。

■冬季区民教養講座「江戸の売り声」日程・会場変更のお知らせ

足立史談会と共催の冬季区民教養講座の日程・会場が次の通り変更となりました。

▼日　時＝12月7日(日)午後1時半～
▼会　場＝郷土博物館2階講堂
▼参加費＝無料（講座参加の方は窓口でお申し出下さい）。

■前号記事訂正　前号「愛されたお化け煙突」記事中の「お化け煙突が稼動したのは大正五年」とあるのは「大正一五年」の誤りです。お詫びして訂正いたします。（編集）

＜再生紙を使用しています＞